OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The Ethnography of Connections of Filipinos in Urban Kansai
Author(s)	Ruiz, Joy Angelica Olay Frieda
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81988
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Form 3

Abstract of Thesis

Name (Ruiz Frieda Joy Angelica Olay)	
Title	The Ethnography of Connections of Filipinos in Urban Kansai （都市関西におけるフィリピン人の人々の関係の民族誌）

Abstract of Thesis

Keywords: active, Filipinos, Japan, life, living, performative

This dissertation is an ethnographic study that tackles how Filipinos in Urban Kansai, Japan perceive and manage their lives as migrants. The study explores how living performative and interactive lives play a part on how migrants are managing and coping with given social constraints and institutions. The study aims to supplement earlier findings in migration studies and migrant agency through emphasizing the migrants' practices of awareness, choice, and control during migration.

The study was conducted in Metro Osaka and its suburbs and Kyoto City and its suburbs in Kansai Region, Japan from 2015 to 2019. In order to accomplish the research objectives efficiently, I employ qualitative research methods, particularly doing participant-observation and non-structured interviews. I participated and joined many activities of Filipinos in Urban Kansai and spent an ample time with them.

The outcome of my research shows that the Filipino in Urban Kansai way of living is based on the migration experience. The Filipino migrants perform migration in their everyday through boundary creating, crossing and maintaining. The results show that Filipinos in Urban Kansai are regularly faced with various kinds of constraints that are connected to past and current contexts, but they are able to employ these to touch on the future. For them, the future not as end-directed, but implies a movement.

This study's results revolve around two main points. These are reflexivity and the relevance of participating in shared and communal activities by Filipinos in Urban Kansai. Filipino migrants exhibit making personal choices. They are knowledgeable about what their options are and the possibilities of taking a particular option. They able to comprehend the choices in relation to the understanding of one's self and of self-improvement.

Filipinos in Urban Kansai show more than just awareness and responses to external and structural forces. They are observed to be able to use such awareness for them to alter the external and structural forces and their situation. These show that the Filipino migrants' practices of how they think about and create their lives involve managing given social conditions and institutions into opening themselves into the world.

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　Ruiz Frieda Joy Angelica Olay　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主査　教授	千葉　泉
	副査　教授	宮原　曉（言語文化研究科）
	副査　教授	河森　正人
	副査　講師	島薗　洋介（グローバルイニシアティブ・センター）

論文審査の結果の要旨

フリーダ・ルイス氏の博士論文は、関西都市部在住のフィリピン人の移民としての生き方を「ライフスタイル」の概念を用いて再定義し、彼女ら彼らが再帰的かつ相互にパフォーマティブに「境界」を創造、あるいは更新することを通じて、どのように彼女ら彼らの関西での生き方を知覚し、また、いかにホスト社会の制度や諸々の制約と折り合いをつけ、行く末を展望しているかをエスノグラフィーの手法を用いて探究した挑戦的な研究である。

国民の約1000万人が世界180ヵ国に暮らすフィリピンが労働力輸出大国であることはよく知られている。しかし、その一方で、フィリピン諸島から海外に移住、移民した人びとが文化的、言語的に極めて多様であることはあまり知られていない。このことは、大きなもので８つ、小さなものを含めるとおよそ200の民族言語集団がフィリピン諸島に居住しているという原初主義的なエスニシティの観点から多様であるということではなく、国民の多くが海外に居住する親族や友人を持ち、経済的にはもちろん、生活様式などの面でも、海外との結びつきが諸島の人びとの暮らしに大きく影響しているということを意味している。本論文は、こうしたフィリピン諸島から海外への人の移動を、予め「フィリピン人性」（Filipinoness）を備えた移民と同定するのではなく、ライフスタイルに関する気づきと選択、制御という視点を採用することで、従来のフィリピン移民研究におけるネットワーク論や行為主体性をめぐる議論を前進させようとしている。そこで最終的に問われているのは、「フィリピン人移民」とはひとくくりにすることのできない人びとが、自らを定義づけ、それぞれの生き方を模索することを通じて、「フィリピン人性」がなぜ、そしてどのように生み出されるのかという問いである。

この問いに答えるため、まず第３章でルイス氏は、関西都市部在住のフィリピン系住民がどのように自己と他者の行為を省察し、それに依拠して行為を行うかに関する条件を評価し、あわせて本論文が参与観察の対象とする領域を、人びとによってさまざまな選択が行われる領域、すなわち“Free Time”として同定する。在日フィリピン人コミュニティに関する先行研究研究では、団体やイベントへの人びとの参加を、ある種「フィリピン人コミュニティ」の本質的な活動として見做しがちであったが、本論文では、そうした団体やイベントでの活動も含めた人びとの日常的な相互行為を通じて、「コミュニティ」の境界が繰り返し引き直される過程を記述することで、本質主義的なフィリピン人コミュニティ像の再生産を回避することに成功している。

続く第４章では、関西都市部在住のフィリピン系住民が自らのライフスタイルを選択する際に見られる具体的な気づきや戦略がフィールドノーツから人びとのナラティブを引用しつつ記述される。そこで人びとは、過去の経験を解釈し、現在と関連づけながら行為を選択するが、こうしたライフスタイルの選択は、フィリピン系住民がどのような社会的なネットワークの中に彼女ら彼らを位置づけ、どのように人とつきあい、どのような言語を話し、何に関心を持つかに関わっている。ルイス氏は、こうした選択のプロセスを、敢えて「移民のプロセス」と呼び、「定住のプロセス」とは呼ばないことで、その内に「移民」、すなわち「ローカルなコンテクストから疎外されたマイノリティ」としてのアイデンティティが形成されるプロセスを読み解こうとする。

第５章は、フィリピン系住民のライフスタイルの選択と、それを取り巻く環境との関係をめぐって、さらに２つの重要な点が指摘される。それは、個々の行為やライフスタイルの選択が社会的な制度や制約と決して無関係ではないということ、そして、そうした制度や制約の中においてすら、個々の選択が環境を変化させる力を持ち得ることの二つである。ルイス氏は、このライフスタイルの選択と制度との間の相互作用は、いくつかの社会的に異なるレベルにおいて観察されると主張する。例えば、社会的なネットワークを広げることは、彼女ら彼らが直面するさ

まざまなリスクや困難を回避するうえで有利に働くため、フィリピン系住民は、さまざまなイベントや組織への参加を通して、ネットワークを広げようとする。しかし、同時に多くの住民が参加する組織やイベントを選んだり、そのなかでの自らの立場を変化させることで、フィリピン系住民の間の社会的なネットワークの性格そのものがクローズドなものから、オープンなものへと変化していくということも合わせて分析される。こうした社会的なネットワークの開放性は、日本社会が用意する「多文化共生」というある種、本質主義的なアイデンティティを強要しつつ、外国籍住民を取り込む制度的枠組みを克服する企てともなる。フィリピン系住民は、「多文化共生」というスローガンを利用しながら、フィリピン系住民とホスト社会の住民との垣根を取り払おうとするが、そうした「境界」の作り替えが可能になるのも、根底にさまざまな選択を許容する開放性が認められるからだ、というのである。

近代的価値観と伝統的価値観の相剋というレベルにおいても、このような制度と選択の間の相互作用は見られる。ライフスタイルの選択は、完全に自由になされるわけではない。既存の在日フィリピン人コミュニティ研究にみられるように、フィリピン系住民は、utang na loobやhiya、pakikisama、sukiといった「伝統的」と呼ばれる価値観にどっぷりと浸かっているかのように一見すると見える。ルイス氏は、この点について、例えばネットワークの形成を円滑に進めるために、擬制的親族呼称が選択的に導入されている可能性を考慮しつつも、伝統的価値観から近代的価値観への移行が比較的容易な点に、「移民」としてのフィリピン系住民のライフスタイルを見出し、「伝統的な価値観」とされるものを戦略的に駆使して新たな親密性を構築して自らの「ネットワーク」を自由自在に拡大・変更していく様を鮮明に描いている。

これら３つの章の記述を踏まえ、第６章では、関西都市部在住のフィリピン系住民にとってのライフスタイルの選択が持つ意味について、柔軟性と再帰性をキーワードに考察される。柔軟性に関してルイス氏は、個々のライフスタイルや行為の選択が柔軟性の根底に、フィリピン諸島の親族関係にみられる双方制と、二者間の関係に基づく柔軟な社会関係の存在を指摘している。また再帰性に関して、過去の経験と現在の状態とを関連づけつつ、人びとが生き方を選択することで、あるべき将来像も移民のプロセスとしてとらえられているとしている。こうして本論文は、人びとのインタラクティブで、パフォーマティブな行為の選択を通して常に「フィリピン人性」が創造し続けられることで、ステレオタイプ的な「フィリピン人」の概念の超克が企てられると結論づけるのである。

ルイス氏の論文には、この他にもフィリピン系住民のイベントや演劇に関する詳細なエスノグラフィックな記述など、個々に興味をそそられる貴重な記録が多く含まれている。しかし、そうした記述を漫然と繰り広げるのではなく、パフォーマティブな相互行為を通して人びとが生き方を選択するプロセスを、手の込んだコーディングを通じて導き出している点に本論文の特筆すべき価値がある。論文の表題にある“Filipinos in Urban Kansai”とは、そうした相互行為が日常的に知覚され、それに依拠して行為が選択されるおおよその範囲を表現している。論文審査では、このようなルイス氏の論文が持つ優れた視点と洞察を高く評価し、本論文を博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。